魔法少女リリカルなのはStrikeS～鋼の意志と不屈の魂～

大三元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅＳ～鋼の意志と不屈の魂～

【Ｎコード】

Ｎ８５８３Ｐ

【作者名】

大三元

【あらすじ】

なのは達と長い付き合いのオリ主が原作の物語に介入していくという話です。暇つぶしにでもどうぞ。

プロローグ

ーーー観測指定世界・遺跡内・一夜ｓｉｄｅーーー

目の前でミスリルで出来たアンティークゴーレムが、そのトラックですら一撃でスクラップに出来るであろう右腕を振り上げる。

ドゴッオォォオン！！

床が砕け、壁にひびが入り、天井から埃や砂が落ちてくる。

どうやら遺跡を荒らす侵入者と認識されたようだ。まあ、そのとおりだけど。

しかし安全な調査だって聞いていたのだが、こんな事なら、なのは達を待つべきだった。

「しかし、なんでゴーレムが居るんだよ。こんなのが居るなんて聞いてないぞ！？」

「君が僕の忠告を無視して、防衛装置を作動させたからだよ」

隣を走っている長年の相棒の無限書庫司書長のユーノ・スクライアが呆れたようにため息をついた。

確かにその通りなんだけど。

「あんな装置分かるか！？　と言うか、バリアジャケットぐらい展開しとけよ。危ないぞ」

ユーノの着ている服は遺跡調査用の服で、丈夫な布で出来てはいるが防御力は皆無だ。
一撃貰えば、あの世へ一直線。そんな事になれば、なのはに俺が殺される。

ドゴッオォォオン。

壁が崩れ、隣の部屋への入り口が新たに出来る。
…まあバリアジャケットでも変わらない気がする。

「いる？」

ある程度走ると、いい感じの広さのある部屋に出った。
俺とユーノは、頷き合うと、急ブレーキを掛けゴーレムと対峙する。

ここで、このゴーレムを倒す。

「……いらないな。　一撃で仕留める」

右腕のリボルバーナックルに分類される杭撃ち機『リボルビング・ステーク』を構える。
このステークは射程も短く、また魔法の補助能力も低い。基本的な射撃魔法ですら発動するのが困難だ。まあ、俺の資質の問題でもあるが、それは置いといて。

このステークは、回転式六連弾倉内に予め魔力入りの弾丸を装填して置けば、自分の魔力を一切使わず破格の威力の一撃を繰り出す事が出来る。勿論、ちゃんと魔法に分類される。
俺の主武器で、俺達の切り札だ。

「チェーンバインド！！」

ユーノが、お得意のバインドでゴーレムの動きを封じ込む。

よし、良い位置だ。さすがユーノ。

後は……俺の役目だ。

俺は右腕を引き、両足に魔力を込め、撃鉄を跳ね上げる。

さあ…行くぞ！！

「どんな装甲だろうと……打ち砕く！！！」

気合いと共に、繰り出した一撃はゴーレムの胸部の真ん中に突き刺さり、打ち砕いた。

「終わったか……」

上半身が砕けちり、崩れ始めたゴーレムを見て、安堵のため息を吐く。

「お疲れ様、一夜」

ユーノが労いの言葉と共に肩を叩いてきた。

「ユーノこそ。　で？これからどうする？　俺は帰還をオススメするが」

今回の調査は、ユーノの個人的な依頼……いやお願いだ。
本来なら航空隊のエースこと高町なのはも一緒のはずだったのだが、緊急の任務が入り遅刻、ならば先行して調べようとした結果がゴーレムとの命を掛けた鬼ごっこだ。
この程度のゴーレムなら俺もユーノも負ける可能性は低いが、万が一という事もある。
なのはを待つと言う選択肢も有るが……遅刻するという連絡を最後に、連絡がつかない。まだ任務が終わらないのだろう。
遺跡に潜ってかなり経つはずだ。そろそろ帰らないとはやてやフェイトに何を言われるか……ブル……勘弁してほしい。

「……そうだね……後日、正式に管理局に調査を依頼しよう」

ユーノは、そう言うと彼の最愛のパートナーの魔力光と同じ色の宝玉を取り出した。彼のデバイスの『レイジング・ソウル』だ。

「……なのはに通信も入れたし、帰ろうか」

「……ついでにはやてとヴィータにも通信入れたら？」

「？なんで？」

首を傾げられた。
ああ、判ってないよ。こいつ……はやてとヴィータが哀れだ。

「なんでも、とりあえず帰ろうぜ」

「うん？」

今度は防衛装置を作動させないように慎重に遺跡を出た俺達は、ルームシェアをしているマンションへと、帰路についた。

第1話

――一夜side――

あの遺跡の調査から三日が過ぎた。
あの後、はやての部隊長就任祝いをみんなでやり、つい、調子に乗り飲み過ぎたせいで二日酔いならぬ三日酔いになった。
まあ、休暇中だから、ゆっくり寝てようとベッドの中で丸くなり二度寝を決めた俺の上に、俺の成長と共に幼児化した赤い子狼がダイブして来た。

「一夜〜！！」

「ゴフッ！？」

威力は想像以上だった。

「おきろ〜」

ばしばしと前足で悶絶している俺の顔を触ってくるアルフ。肉球が気持ちいい。
ではなく、何のようだ。
肉球の感触を楽しみつつ目を開けると、肉球のどアップが飛び込んできた。

「おはよう」
アルフの首筋を持ち、目の前に掲げる。
昔、フェイトの前でやったら、マジ切れされたんだよな。これ。

「おはよう」

「もうお昼だよ？」

片足を上げたアルフの後ろにフェイトが居た。
さすがにもうフェイトも怒ったりはしない。

「でっ？二人は何のようだ？」

「シャーリーから連絡があって、私達のデバイスのメンテナンスが終わったってんだって、一緒に行こう」

「判った、少し待っててくれ」

「うん。判った」

フェイトとアルフが部屋から出て行ったのを確認し、すぐさま服を着替え洗面所に向かい顔と歯を磨く。

「悪い、待たせた」

「ううん。大丈夫、行こう」

その後、フェイトの運転する車で本局に向かった。

――――一夜ｓｉｄｅ終――――

何時来ても、本局のデバイスルームは薄暗い。そう思いながら空

中に浮かんでいる赤いクリスタルを手に取る一夜。
右手の中のクリスタルの感触がひどく懐かしく感じる。

「久しぶりだな。アルト」

《お久しぶりです。　二日酔いですか？》

クリスタルが点滅し、女性の声が響く。
どうやら、体調不良を感じ取り、一夜の体をスキャンしたらしい。

「いや、三日酔いだ」

《弱いのに飲むからです。　フェイト、アナタも何故止めないのですか？》

「えっ？私？」

突然話を振られ、困惑するフェイト。
確かに三日前に一夜達と飲んだが、何故自分なのだろう？
と言うか、何で一緒に飲んだことを知っているのだろう？

《主が酒を呑むのは、アナタとジグナムが居るときだけです。そしてジグナムは真っ先に潰れる。残るは、フェイト、アナタだけです》

「なのは達は？」

《なのは達は、主よりユーノでしょう。それに彼女達は、最初の一杯で暴走します》

なるほど、納得。

「あたしは？」

アルフが前足を上げる。

《アナタは、調子に乗って飲ませる側の人間でしょうが》

「……アルト達は、ほっといて、シャーリーありがとう」

アルト達のやりとりを笑いながら見ていたメガネの女性に一夜が礼を言う。

「いえ、何とか六課始動前に出来て良かったです。　ちゃんと注文通りの設定にしてありますよ」

「そうか、訓練ルーム使えるか？」

「はい。許可は取ってあります」

「さすがシャーリー」

シャーリーに別れを告げ、訓練所へ移動するフェイトと一夜とアルフ。

訓練所には、数人の魔導士達が自主トレを行っていた。

その自主トレをしていた魔導士達もフェイト達が入って来ると、フェイト達の事をチラチラと盗み見し始めた。

片や美女で管理局を代表するエースの一人、フェイト・Ｔ・ハラ

オウン、片や色々な意味で有名で、これまた管理局を代表するエースの一人、南部一夜。
その二人が訓練所に入って来たのだ、気になるのも仕方がないだろう。
もっと本人達は気にしてもいないし、フェイトに居たっては、そんな視線に気づいても居ない。

「久しぶりだな。フェイトと戦うの」

セットアップした一夜が言う。
彼のバリアジャケットは赤を貴重にした重装甲のタイプで、両脚には移動を補佐するための大型スラスターがついている。

「そう言えば、一年ぶりかな？」

前は休みの日の度にジグナムと代わり番こに模擬戦をして、その後、なのは達と合流して遊んだり買い物をするのが、フェイト達の恒例行事だったのだ。

「ちなみに今までの対戦成績、２０１対２００、１９３引き分けで俺が勝ってるからな」

「……あれ？おかしいなあ？私の記憶だと２０２対２０１、１９７引き分けで私が勝ってるんだけど？」

「記憶違いじゃないのか？」

「私が？　まさか、一夜の方が間違ってるんじゃない？」

「「……」」

不穏な雰囲気を感じ取ったのか、または本能な危険を察知したのか、訓練所に居た魔導士達がそそくさと訓練所から出て行く。
ちなみにアルフも出て行った。

距離を取って、無言でにらみ合っていた二人だったが、次の瞬間姿が消える。

ガキィン！！！

訓練所の真ん中、ステークとアサルトフォームのバルディッシュ・アサルトがぶつかり合い激しい金属が響き渡る。

《トリガー》

アルトが好機とステークを発射する。
必殺の威力が込められた一撃を、フェイトはソッニクムーブを使い空中に逃げる事でかわし、すぐさまカートリッジをロード、電気を伴う砲撃魔法『プラズマスマッシャー』を放つ。

「プラズマスマッシャー！！！」

その砲撃を避けるのは無理と判断し、防御魔法を発動させる。

「防御！！」

《プロテクション》

結界に砲撃が当たり、激しい閃光を生む。

「ちぃ！？カートリッジロード！！」

プロテクションにひびが入り、補強のために魔力を上乗せする。

《了解》

魔力の壁の前に金色の砲撃が霧散していく。

「ソッニクムーブ！！」

両脚のスラスターと魔力で全力で加速、空中のフェイトに肉薄、右手のステークを振り抜く。

「もらった！！」

「甘いよ！！」

フェイトに届く一歩手前で、バチンっと一夜の全身が空中に固定される。

「設置型のバインドか！？」

迂闊だったと後悔する一夜。

フェイトが少女の頃からこの戦法に引っかかって負けていたのだ。

「げっ！？」

空中に固定された一夜の前でフェイトがカートリッジをロードしていた。それも二発。

彼女の魔法で、一度に二発のカートリッジを使う魔法を彼は一つ

しか知らない。

「トライデント……」

フェイトの前に広域魔法陣が展開する。

「スマッシャー！！！！！」

魔法陣から放たれる三つに別れた砲撃魔法が、一夜に迫る。

バインドで動けない彼に避ける術はない。そして、この距離なら彼の防御魔法の展開も間に合わない。

フェイトは勝利を確信した。

だが、彼女は忘れていた。目の前の男は、なのはの切り札である、スターライトブレイカーを真っ正面から突き破った事が有ることを。

「アルト！！カートリッジロード！！！魔力を全部推進に回せ！！！！」

《……了解》

自身の魔力を全て推進に回し、フルパワーでバインドを無理やり引きちぎり、トライデントスマッシャーの中に飛び込んでいく。

「えっ？」

砲撃魔法の中に自分から飛び込んでいく。まさに自殺行為以外の何者でもない。ましてやバリアジャケットのみで、防御魔法も無しだ。

だがもし、そのバリアジャケットが

「しま…」

常識はずれの防御力だったら、破壊の奔流の中、進むことが出来る意志と推力を持っていたら。

「取った！！」

砲撃魔法の中を進んできた一夜が叫ぶ。その姿は、左の上半身を前にしたのか、左の上半身のバリアジャケットは完全に破壊され、肌が露出して、左足のスラスターは破壊されている。

だがそれでも彼は止まらず、無傷の右手を全力で突き出す。

フェイトの喉元にステークが、鋼鉄の杭が突きつけられた。

「俺の勝ち…だ…な…」

それだけ言って意識を手放す。

飛行魔法が解除され、一夜の体が重量に引かれ落ちていく。

「一夜！？」

慌てて、フェイトが空中で彼の体を捕まえる。

《……医務室に運ぶ事を推奨します》

非殺傷設定とはいえ、砲撃魔法の中を進んで来たのだ。命に以上は無いだろうが、医者に見せた方が良いだろう。

「うん。判った」

地上に降りるフェイトにアルトが忠告をした。

《地上に降りるのはオススメしませんよ。せめて強化魔法を使ってからにした方が》

「え？なん…でぇ！！？！」

地上についた瞬間、一夜の体重を支えきれず、押し倒されるフェイト。

《一応、忠告はしましたよ？》

「……アルフ…」

その後、アルフを呼び、一夜を医務室に運んだフェイトは、アルトと一緒にシャーリーに遣りすぎたっと怒られるのだった。

第1話（後書き）

次回から機動六課です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8583p/

魔法少女リリカルなのはStrikeS〜鋼の意志と不屈の魂〜

2011年1月9日01時08分発行